想定外の事態における経験や気づきを、教育の「これから」につなげる

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちにとって、まさに予測困難な事態であった。
教師、生徒はこの状況下での経験や気づきを、これからの教育活動や学びにどのようにつなげていけばよいのだろうか。

「ミニマムの資質・能力」を追究しながら、教育活動の見直しに取り組む

北海道旭川東高校 **松井恵一** × 福井県・私立福井南高校 **浅井佑記範**（ゆきのり）

これまでの枠組みの中では対応ができない状況を経験した生徒、教師がともに学び合う存在として語り合った時、教育活動の「これから」が見えてくる――With/After コロナの学校のあり方について、2人の教師との対話を通じて考える。

「教えてくれる先生」から「ともに考える先生」へ

柏木　新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、生徒も教師も先が見通せない日々を経験しました。しかし、そうした状況の中で、自分のあり方や生き方を深く考え、主体性を発揮して教科学習や探究学習に取り組んだ生徒がいたことを、私たちは全国の先生方から伺ってきました。P.8～11では、3人の高校生が臨時休業中の気づきを語っていますが、臨時休業を成長の機会にすることができた生徒は先生方の学校にもいたのではないでしょうか。

松井　それまでのような学校生活が送れなくなったことで、「今」の大切さに気がついた生徒は少なからずいます。生徒の気づきを理解する上で重要なことは、「今」というものの捉え方が変わったことです。それまでの「今」は、「計画通りの未来につながる今」でしたが、臨時休業という予測困難な事態を経験して、「計画通りとは限らない未来につながる今」へと、生徒の認識が変化したのだと思います。ただ、もしかすると生徒たちは以前から、未来は計画通りにはいかないものだと感じていたのに、私たち教師が「これまで通りの社会」を前提に教育を行っていたことに、生徒は内心、違和感を覚えていたのかもしれません。

浅井　私たち教師は、生徒に「未来は予測困難」と言いながら、実際には「先生の言うことを聞いていれば大丈夫」といった態度で生徒に接してきた気がします。臨時休業という思わぬ事態の中で自立し始めた生徒を見ると、以前から私たちに対して疑問を抱いていたのかもしれませんね。今回の臨時休業は、私たち教師にとって、自分たちの経験や古い枠組みをあてはめるだけではやっていけない社会になったのだと気づかせてくれる機会になったと思います。広島県の平川教育長の言葉（P.16～17）の通り、教師が正解を知っている問いに生徒を向き合わせる教育ではそもそも不十分なのです。それに、そもそも教師だけが正解を知っている問いなんて、生徒にとっても、つまらないですよね。教師も答えが分からない

問いだから、生徒は前のめりに考えられるし、「先生も一緒に考えましょう!」と、協働的な姿勢で問いに向き合おうとするのだと思います。

松井　分からない問いにともに向き合う時、生徒と教師は対等な存在です。臨時休業を経験した生徒たちは、教師から答えを教えてもらうことではなく、答えが分からない問いについて、教師と語り合い、考えることが大切なのだと、気がついたのではないでしょうか。

北海道旭川東高校　2学年主任
松井恵一　まつい・けいいち
教職歴23年。同校に赴任して17年目。地理歴史・公民科。

北海道旭川東高校

◎学校標語「シマレ　ガンバレ」「挙校大和」を掲げ、校訓「生をよろこべ　矩にしたがえ　全力をつくせ」の下、品性と礼節を重んじながら自由を謳歌する校風を誇る。卒業生や地域の人材と連携した探究学習に力を入れる。「地域医療を支える人づくりプロジェクト」の医進類型指定校。
◎**設立**　1903（明治36）年
◎**形態**　全日制・定時制／普通科／共学
◎**生徒数**　1学年約240人
◎**2020年度入試合格実績（現役のみ）**
国公立大は、旭川医科大、北海道大、東北大、東京工業大、京都大などに152人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ321人が合格。
◎**URL**　http://www.ah.hokkaido-c.ed.jp/

福井県・私立福井南高校　進学指導部長
浅井佑記範　あさい・ゆきのり
教職歴8年。同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科。

福井県・私立福井南高校

◎福井専修学校を母体に、1995年全国の私学で初めて総合学科を設置して開校。「信義・友愛」を建学の精神とし、物事を正しく判断し実行できる能力を備えた個性豊かな人材の育成を目指す。普通教育と産業教育の均衡を図りながら、体験学習や情操教育など、多様な教育活動を展開。ニュージーランドの姉妹校への長期・短期留学を行う。
◎**設立**　1995（平成7）年
◎**形態**　定時制／総合学科／共学
◎**生徒数**　1学年約80人
◎**2020年度進路実績（現役のみ）**
4年制大は、福井県立大、桜美林大、東京農業大などに8人が合格。短大、専門学校進学36人。就職33人。
◎**URL**　https://www.fukuiminami.ed.jp

自分のあり方を考える問いを与えていたか？

柏木　自分の進路を考えるためにオンラインツールを活用して、普段は出会えない職業人や研究者など、学校という枠を超えてつながり、知見を広げ、進路観を深めた生徒もいます。自宅にいながら、社会につながろうという意欲を持ち、オンラインインタビューなどを実際に試みる行動力に驚きました（P.8〜11）。

松井　高校3年生だから受験のことだけを考えているはずだというのは、大人の誤解だと思います。本校の3年生を見ても、成績のことだけでなく、社会の中で自分はどんな存在でありたいのかを真剣に考えている生徒が少なくありません。

浅井　漠然と進路を決めていたけれど、想定外の事態の中で自分を見つめ直し、本当の目標が見つかった生徒もいます。社会のあたり前が変わったことで、成績やイメージだけで生き方を決める進路選択から脱却したのです。そうした生徒が増えていけば、私たち教師は、100人の生徒の100通りの進路選択に向き合うことが求められます。楽しみですが、進路指導の力量が問われます。

VIEW21編集部
統括責任者
柏木 崇
かしわぎ・たかし

松井　教師が「高校生はこうあるべきだ」と、生徒に最適解として道を示すのではなく、生徒自身に「君はどうありたいのか」と問い、自分で納得解にたどり着かせることが求められます。生徒が「自分はどうありたいのか」を考える問いを立てる際の材料として、生徒が自身の行動や考えを振り返ってきたポートフォリオを教師が活用することが大切だと思います。

浅井　生徒が「自分はどうありたいのか」を考える問いは、進路面談のような場だけではなく、教科の授業においても求められますよね。教科の知識と見方・考え方を土台として、「自分はどうありたいのか」を問い続けている学校の1つのモデルが、広島県立広島叡智学園中学校・高校の取り組み（P.18〜19）なのでしょう。

松井　面談で生徒に、「将来、何をしたいの?」と問うことがありますが、実はそれは、問いではなく、単なる確認だったのかもしれません。

生徒が自分を深められるような問い、例えば、「3つの学部に進学できるとしたらどこがいい？」「同時に3つの職業に就けるならどんな職業に就きたい？」といった聞き方もできるのではないかと思いました。

浅井　そのように生徒とのかかわり方を顧みて、指導のあたり前を見直すことが、これからの教師には求められているのだと思います。

ミニマムな力を鍵に自校の教育活動を見直す

柏木　臨時休業中、学習面や進路面で主体的に活動する生徒の姿を目にしたことで、先生方は予測困難な社会で求められる資質・能力とはどのようなものか、そうした資質・能力がなぜ重要なのかを改めて深く考えたことと思います。では、先生方が目にした生徒の変化・成長を、今後の教育活動にどのようにつなげていけばよいのでしょうか。

浅井　今までの教育活動が、予測困難な未来に向き合う力を育むものであったか、生徒に自分はどうありたいのかを問いかけるものであったかといった視点で教育活動を見直したいですね。そのためには、生徒が得た気づきや抱いた疑問を、丁寧に聞き取ることがとても大切です。

松井　自分たちの教育活動は、これからの社会で必要な資質・能力の育成に資するものなのか、もしもズレがあるとしたら、それをどう修正するのか、このままの方針でよいと判断した場合、さらに注力するものは何かを考えることで、今回の経験が価値のあるものになると思います。

柏木　では、そうした教育活動の見直しは、どのように進めていくとよいのでしょうか。まず、学校として育成を目指す資質・能力を校内で共有することは不可欠かと思います。その際に大切なことはありますか。

松井　学校としてこれだけは生徒に保障する、ミニマムな指導を明確にすることだと思います。生徒にあれもこれもと、どこまでも求め、与えるのではなく、どのような社会になるか予測できないからこそ、学校としてここだけは必要だというものを言語化し、その上で生徒一人ひとりの興味・関心や志望に応じ、主体的な学びを支援することが重要です。

浅井　学校として生徒に保障するミニマムな資質・能力とその育成のための教育活動は、生徒と一緒に考えていきたいですね。本校では例年、生徒が学校の課題や展望を話し合い、理事長、校長に提言する場があります。自分たちが生きる未来と、こうありたいという生き方を踏まえて、高校時代にこんな力をつけたい、だからこんな学校であってほしいと、生徒が福井南高校生として主体的にミニマムな資質・能力を考える場であり、本校の生徒にとって欠かすことができない教育活動になっています。

松井　学校として生徒に保障するミニマムな資質・能力を考える際にも、ポートフォリオを通した詳細な生徒把握が欠かせないと思います。臨時休業中、生徒のポートフォリオにじっくり目を通す時間をつくったのですが、そこで気づいた生徒の興味・関心の変遷、深化を面談で生徒に話していく中で、生徒自身が私の気づきをヒントに、進路の選択肢を広げたり、今自分に必要とされている学習を言語化したりするケースが多く見られました。教師が生徒のことを熟知して初めて、ミニマムな資質・能力の設定も生徒が納得できるものになり、また、自分のあり方に気づく問いかけを生徒に投げかけられるようになるのだと思います。

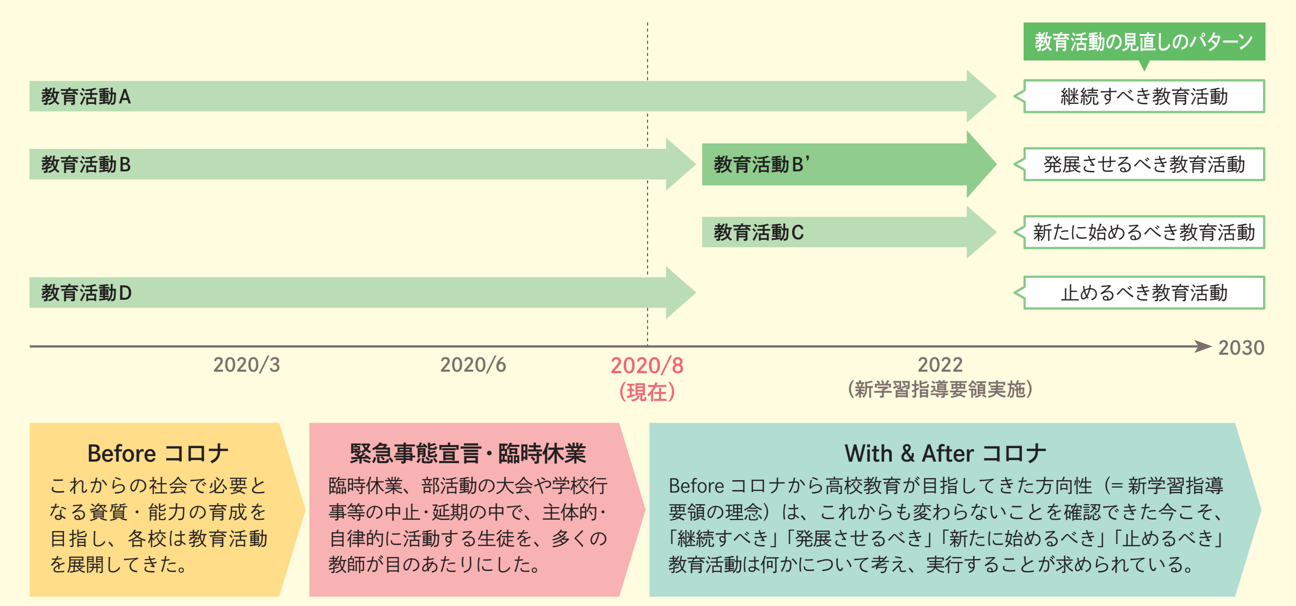
浅井　想定外の事態においても、自分ならではの感性を働かせて、学びや生活をより豊かなものにしようと行動した生徒たちは、新学習指導要領を通じて育成を目指す生徒の姿そのものでした。つまり、私たちがこれから実現すべき教育は、Before コロナの教育と決して非連続なものではないどころか、その必要性がより高まったと言えます。ただ、今回の事態を通じて、私たちも多くの気づきを得ました。新学習指導要領の実施まで2年を切った今、これまでの取り組みは肯定しつつも、改めて今回の事態を踏まえ、カリキュラム・マネジメントに基づいた教育活動の不断の見直しは必要でしょう。

不安を吐露できる場は生徒だけでなく、教師にも必要

柏木　教育活動の見直しを進める際、どのようなことから検証を始めると、議論が具体化・活性化するでしょうか。

浅井　オンラインツールの活用の視点における教育活動の見直しは、議

図　臨時休業という想定外の事態を契機に教育活動を見直していくイメージ



学校としてこれだけは生徒に保障する、ミニマムな資質・能力を明確にすることで、教育活動の見直しは地に足のついたものになります。そして、ミニマムな資質・能力を考える際には、学校だけでは育成が困難な、保護者や地域の力を借りながら育成を目指すべき資質・能力はどのようなものなのかも、見極めておく必要があると思います。（松井先生）

教育活動を見直す際、判断のよりどころの1つとなるのが、これまで蓄積してきたポートフォリオです。生徒の活動の履歴やそこでの変化・成長の軌跡がストックできているので、一つひとつの教育活動についても、継続すべきか否か、あるいはそこで生徒にどんなかかわりをすべきか、教師視点で今のあり方を判断する材料となるはずです。（浅井先生）

論が具体化しやすいと思います。本校では、教育活動の効率化と「3密」の回避を目的に、生徒会選挙などの学校行事にオンラインツールを導入しました。また、入学後、先輩たちと交流する機会に恵まれない1年生のために、有志の生徒がオンラインでの異学年交流会を提案したことで、新しい形の教育活動が今年度スタートしました。まさに、生徒目線での問題の発見と、解決策の提案だったわけですが、オンライン上の生徒同士のコミュニケーションの様子を見たベテラン教師が、乗り気ではなかったオンライン授業に、その後挑戦し始めたのです。生徒が考え、悩み、挑み、喜ぶ様子は、教師を強く動かしますし、その瞬間、私たちは実は生徒から学んでいるのです。私たちが一番大切にしている生徒の存在を、組織が変わる原動力につなげていく上で、オンラインツールには大きな可能性があります。

松井　卒業生を招いた進路講演会など、生徒が進路意識を高められる行事を、限られた時間の中で「3密」を回避しながら拡充・継続していくために、オンラインツールは有効に利用したいですね。ただ、年度途中の教育活動の見直しは、私たちにとってもチャレンジングなことですから、「やってみて、生徒はこんな反応だった」「ここが困った」などと、教育活動の見直しの成果や課題を教師間で率直に語れる場が不可欠です。自分たちの喜びや不安を共有することで、次に進んでいく原動力がさらに高まるでしょう。

浅井　変化の過程での不安を語り合うことは、生徒にも教師にも必要ですよね。むしろ、教師にこそ、これまではそういった場が足りなかったのかもしれません。予測困難な社会を生きる者として、私たちにも不安を吐露できる場は必要です。

松井　先行きが分からないからこそ、何が正解かという答えよりも、何が不安かを吐露できる場所や、つながりを校内につくっていきたいですね。教師も1人で不安を抱えたままだと、どうしても自分の過去の経験だけで考え、生徒のことを「これも、あれも不足している」とネガティブに見てしまいます。しかし、教師が協働的な環境にいれば、「こんなこともあんなこともできるんじゃないか」とポジティブ思考で生徒を評価できるはずです。